

## 野菜生産者のための相場研究

# 今年の市場相場を読む 春野菜

来年の春野菜の作付計画を考える時期である。今年は、どんな品目をどれだけの面積、作付けようかと迷う声も聞かれる。何しろ、平成四年は年間を通じて野菜類は低迷した。が、昨年は夏秋期から野菜は軒並み高くなつた。今年の作付額の目安になる。昨年の市場相場の推移を、「どう」読んだら「いいのか」。そんな農業経営者の参考に供するために、「市場相場を読む」をお届けする。なお、以下は東京市場において、特徴的な相場推移を見せた品目について解説したものである。

### バレイショ 昨日同様、 五月以降高値推移か

### ダイコン 「浅漬けの素」人気による 消費増の可能性を逃すな

### ゴボウ 季節商材の強みを武器に直接 取引や商系との提携の模索を

### ホウレンソウ 本来の旬のおしさを置き去りに すれば輸入商材の進入を許す時代

#### 【概況】

平成五年は、年明けのスタートは例年よりも少なめの出荷から始まつた。それが三月に向かつて一本調子で増加したことから、暴落商状となつた。しかし、新ジャガのピークである五月には例年より二割近い入荷減となって、反動のように価格は急上昇した。以降、夏に向かつて不需要期になつていく過程で、入荷量も減り価格も下降線をたどるのだが、平成五年は五月に数量不足となつた後も、減少傾向のなか、例年より二～三割の入荷減が年末まで続いた。そのため、価格も五月に一五〇円近くまで上がつたまま八月までこの水準が続き、一〇月に高値疲れの様相を呈するものの、以降例年より高い推移。これは平成六年も続く。

#### 【背景】

例年、年明けから春先の府県産新物が出るまでの間は、道産のバレイショは温度の上昇に伴つて発芽が始まつたため、三～四月の終了まで気が抜けない。芽が出て商品価値を落とす前に販売しなければならないが、数量が集中しては価格を崩す。気温上升と発芽の状態、そして市況の推移を見合せながらの出荷となる。平成五年は、一

#### 【概況】

平成四年には周年を通じて低迷した感のあつたダイコンも、平成五年には年明けから春にかけて好調。五月に反動のように単価安となるが、夏場は高騰した。ダイコンは家庭用から業務用、加工用と需要の底辺が広い品目であるため、年間を通じてかなり数量が入荷する。春に多く夏場には少なくなるが一〇月ごろに秋のピークがあり、年末需要で一二月は増えるというパターンとなつた後も、減少傾向のなか、例年より二～三割の入荷減が年末まで続いた。そのため、価格も五月に一五〇円近くまで上がつたまま八月までこの水準が続き、一〇月に高値疲れの様相を呈するものの、以降例年より高い推移。これは平成六年も続く。

#### 【背景】

入荷の推移は、平成元～四年までと、平成五年はそれほど大きく増減があつた訳ではない。しかし夏場には本来は安くなる時期に高騰し、秋の需要期には入荷増もある。だから単価は前半安く、後半は高い平成六年に入ると持ち直したが、夏場の高温での出荷の前進化や作柄不良で秋には品薄。

#### 【背景】

ゴボウは系統出荷の他に、商人流通がかなりのウエイトを占める品目である。貯藏性が高く、加工仕向け量もかなりあることから、出荷をコントロールしやすい。この需給調整ばかりは、系統団体は商人にはかなわない、といわれる。かなり相場も変動するため一見分かりやすく、今年高いなら来年作付けてみようか、と思う生産者は多いようだが、みごとに安値になり、次の年はもう作らない、とこりてしまふのがよく

#### 【概況】

平成四年はゴボウにとつては前半に暴騰して後半は低迷した年であった。そのため、平成五年は前半（七月まで）が安く、後半は高くなつた。毎年、この前年との逆転現象は起こる。今年高かつたら、来年は作付面積を増やす、逆の場合は減らすという動向となるため、二年ごとによく似た年間推移をたどるという、面白い品目だ。平成元～四年までの平均と五年とを比べると、一月は産地の正月休みがあるためにやや減少するものだが、本来、冬場が旬の野菜であり、二～三月にピーク。八月に最低となり、秋～冬に増えていく。平成五年の場合、年明けは例年より高めの単価でスタートしたためか、例年上げてくる四～五月には上がり横ばいとなつた。しかし、六月以降、急騰して九月にピークを打つと二月に持ち直すまで、暴落した。

#### 【背景】

夏場の高騰は、冷夏による野菜類の全体の高値に引きずられたためだ。なぜなら入荷量的には例年よりかなり多かつたからである。しかし、一〇月、一一月の暴落はこの数量の多さがモロに市況に反映されたためであり、むしろ前進出荷となつただけ、一二月は数量が足りなくなつた。ホウレンソウは近年、夏場の消費が拡大している。かつては夏場は産地も少なく、高い価格の

流通ジャーナリスト

小林彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。青果物流通情報データベース「チャルシーネット」、青果物流通を斡旋する「農経マーケティング・システムズ」を主宰。著書に『ドキュメント青果物市場』『日本を襲う外国青果物』『リポート青果物の市場外流通』などのほか、生産、流通関係誌紙での執筆多数。

度この時期に失敗している。前年の安値推移で数量を絞っていたものの、年明けから出荷の遅れを取り戻すために、三月に向かっての数量増加のピッチが早すぎたのだ。なぜこんな無茶をしたかといえば、発芽の危険性のためであった。夏場の高騰は、他の野菜類の品薄、高値の影響が、バレイショウ購入増につながったから。『高騰』といつてもKG当たりせいぜい一五〇円程度のものであり、割高感がなかったためだ。

### 【今年の対応】

平成五年の秋以降、今年に入つてもバレイショウの末端の動き、相場は順調に推移している。平成四年に、イモ・タマが原因不明ともいわれた低迷状況が年間通じて続いたのがウソのようだ。一説には、平成五年の野菜高値で、比較的安いバレイショウの購入、消費が増えたことで、消費者に購入の習慣がついた、などといわれる。実際、バレイショウはかなり地味な商材ではあるが、有機栽培品がこのところ一般にも流通が増えてきたことは事実だ。冬場は道産が主流だとはいえる、どこの地域にもある地場産は消費者にとって「安心商材」である。

減りながらも価格を下げるは、産地の作物が好転し、逆に地方にも潤沢に出回り、中央からの輸送が激減したためだ。

### 【今年の対応】

今年の秋は、サンマの豊漁であったが、当初は珍しくダイコンが潤沢だった。サンマとダイコンの出来は逆になるというジンクスがある。しかし、夏場の高温の影響や作付けの前進傾向で、果たせるかな一一月にはや品薄傾向もあり、ジンクス通りとなつたようだ。今年の冬は、どうやら暖冬となるらしい。鍋物やオデンなどの需要が元気がなければ、ダイコンの動きは余り期待できない。平成六年の年初めは冬らしい冬となつたため、ダイコンは堅調に推移したが、どうも今年は期待薄か。ただし、浅漬け需要でこのところダイコンの人気は悪くない。エバラ食品などの「浅漬けの素」の売れ行きが順調で、家庭で手軽に漬ける風潮が強まっている。この状況を見て、一月からはハクサイ（茨城）が、年明けには長ナス（福岡）が、「浅漬けの素」との提携企画を打ち出した。ダイコンも乗り遅れてはならない。

あるパターンだ。貯蔵施設を持ち、多くが卸売市場を舞台に勝負をかけるのは危険であることは述べたが、産直や直接取引となればその限りではない。しかし、単一の産地ではどうしても周年対応できるわけではないので、不利なことは否めないところだ。だが、同じゴボウでも「新ゴボウ」などはその限りでない。季節商材としての差別性なら、周年という要素がなくとも勝負ができる。また、他に大型品目を持つ産地や周年で商品ローテーションを確立しているならば、既存の取引先との継続した関係の中に、ゴボウとその加工品も「相乗り」させることは可能である。さらに、発想を市場対応ということに置かず、その敵に回したら怖い商人と提携するという思い切った方法もある。取引はかなりシビアな面があるはずだが、安定して計算できる経営も可能な気になるだろう。何度もいうが、ゴボウは市況に惑わされてはいけない。

ものを業務用が買支えてきた。しかし、主に東北産地などが夏ホウレンソウの雨除け栽培技術を確立して、数量的に拡大し価格もこなってきたこと、夏場に近畿で無理して栽培するより、標高や緯度の高い地域でしっかりと食味のいいホウレンソウが生産できるようになったのが大きい。

### 【今年の対応】

ホウレンソウの夏場の消費が拡大することには、産地や流通業界にとっていいことに違いない。しかし、本当に葉物が安くておいしいのは冬であり、消費者は早晚、そのことに気がついてくるだろう。これまで、産地は基本的に「有利販売」でくる品目や時期、販売方法だけを追求してきたが、それによって、本来の旬を置き去りにし、したがって、本当においしい野菜を消費者に提供することを忘れてきた。年明けには安くなるために、産地は「捨て作り」の感覚がある場合が多いが、その感覚が、輸入品の増大をもたらすことにつながっているのだ。小売店が、二～三月に最も熱心に売る野菜商材は輸入アスパラとブロッコリーである。今年はホウレンソウを仕掛けたい。

